それは、後に伝わる、戦乱の世の物語。

〈竜の娘（ディラジーナ）〉の名を持つ、「勇者」と呼ばれた薄緑色（ミルクグリーン）の髪の少女。
そして、彼女に「導かれた」７人の男女。

彼女たちが、キングレオ城、サントハイム城を相次いで化物（モンスター）の手から解放し、サントハイム王の遺（のこ）した立て札に従って、天空の城に上る鍵「天空の武具（セレスティアル・アームズ）」を揃え始めた時。
そして、スタンシアラ王家の協力を得て「天空の兜（ガレア・セレスティア）」を手に入れ、次の武具「天空の盾（スクータ・セレスティア）」が安置された城塞都市・ガーデンブルグへの道を急いでいた時。

これは、そんな時の、「勇者」たち一行の、恐らくは平穏な一日の物語である。

日常系ドラクエ４二次創作小説

「ライヴ・アンド・ゴー！」

～エニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」第５章より～

あさづけ兄貴

バトランド王国の東、果てなく広がる大山岳地帯。
その山間の盆地に、彼女たちはいた。

傾いた陽が、山々を赤く染めてゆく。

辺りがざっと見渡せる平地。
ところどころ、思い出したように、木がぽつんと生えている。

そのうちの一本の下を、一行は、今夜の野営の場所と決めた。
同じ平地ならば、高所から少しでも遠くを見渡せるよう、登れる木のある場所がいい。

すぐ向こうに見える山。

あれを越えれば、ガーデンブルグは目前だ。

＊

さて。
その野営地から、歩いて１０分ほど離れた場所。
ここで、誰知らぬ、命を賭けた大勝負が始まっていたのである！

相手をじっと見据える、その目。
風になびく、栗色の髪と青いマント。
頭には、先の尖った、独特のデザインの青い帽子。

「導かれし者」のひとり、そして勇者ディラジーナの最大の親友（カメラード）。
サントハイム聖王国第一王女にして、第３２回エンドール武術大会優勝者。
名実共に、世界最強の武術家。
「不屈の王女殿下（ハイネス）」、アリーナ・フォン・サントハイムである。

対して。
アリーナからやや離れたところに立つ、その相手。

アリーナに負けぬ、鋭い眼光。
その身体を覆う、茶色の体毛。
大地を咬（か）む、４つの足。
口には、湾曲した２本の鋭い牙。

もちろん、彼は人間ではない。
しかし彼は、また、化物（モンスター）でもない。

「山猪（マウンテンボアー）」。

元来、イノシシというのは、気性の荒い動物である。
その亜種で、山岳地帯に適応するため、より筋力を増し、牙を研ぎ澄ませた種族を、人間は「山猪」と呼んでいた。

今、アリーナの眼前にいるのは、その山猪、その中でもかなり大型のものなのだ。

アリーナの服が、ところどころ裂け、破れている。
肩に、太ももに、そして頬に、うっすらと血が滲んでいる。
恐らくは、この山猪につけられたものであろう。

そして、山猪の体毛もまた、数ヶ所、血で固まっている。

互いに、致命傷にならぬ傷。
アリーナと山猪とは、互角の闘いを繰り広げてきたのである。

そして今、その戦いも、終わろうとしていた。

山猪が、ぐるうっ、と、唸りを上げた。
頭を下げ、牙を前へ出す。
前足の蹄(ひづめ)で、土を、ざりっ、ざりっ、と掻く。
上目づかいに、睨む。

明らかに、攻撃の合図である。

山猪必殺の攻撃‥‥すなわち「突進」。
己の身体を弾丸と化し、相手に叩き込む。
シンプルであるが、いや、それ故に、実に恐るべき攻撃である。

それが「攻撃」の合図であることは分かったのだろう。
アリーナも、少し目を細めて‥‥
そして、言った。
「そっちがその気なら、こっちも‥‥」

ゆっくりと、両手を顔の前に上げる。
拳を少し緩め、わずかに指を開く。
右足を前へ。

拳(パンチ)、脚(キック)、そして捕(キャッチ)のすべてに移行できる、アリーナ独特のファイティングポーズだ。

緊張が、両者の間に満ちてゆく。

勝負は一瞬。
最後に立っているのは、アリーナか、それとも山猪か？

「ブフォーッ！」
山猪が吼(ほ)えた！
同時に、４つの足が地を蹴る！

アリーナが、目を大きく見開いた！

ズドドッ！ ズドドッ！ ズドドッ！
轟音と共に、高速でアリーナに迫る褐色の砲弾！

二つの影が交錯する！
山猪の鋭い牙が、まさにアリーナの胸を貫こうとする、その瞬間‥‥

アリーナが、わずかにサイドステップした！

山猪の牙が、アリーナの左脇腹をかすめる！
しぶく鮮血！

‥‥いや、その鋭い牙がえぐったのは、アリーナの皮膚、ほんのわずかのみ！
そして、山猪の頭が、アリーナの左横を通過したこの瞬間、これこそが、アリーナの狙っていたタイミングであった！

「ここっ！」
アリーナが、自分の脇の山猪の、その首に両腕を回し、ロックした！
同時に、上体を後ろに反らす！

「うおおおおおおおっ！」
アリーナの叫びと同時に、褐色の巨体が、頭を下に、浮き上がった！

アリーナの力だけではない。山猪の突進力が、頭を固定された事により、アリーナの腰を支点とした回転力に、そのまま変換されたのだ。

アリーナに首を極(き)められたまま、彼女の肩の上で、逆立ちの姿勢となる山猪。
手足をじたばた動かしてもがくが、首を極める両手は外れない。

そして、その体勢で‥‥
「ヤアッ！」
再びの叫び声と共に、アリーナがジャンプ！
そのまま、肩に乗った山猪を前に傾けながら、自分は後ろに倒れ込む！

山猪の身体が、頭を下に、垂直に落ちる！

ドグシャァッ！

嫌な音を立てて、山猪の頭が地面に激突した！

山猪が、手足をぴんと突っ張り‥‥
やがて、それが緩むと、程なくその体が、ぐらっ、と揺れ、倒れた。

アリーナが起き上がる。

山猪を見下ろす。
無残に潰れた頭蓋骨。

アリーナの使う「サントハイム王家武闘術」の技のひとつ、〈杭(ブフレック)〉。
その必殺の技をもって、アリーナは山猪を今、屠(ほふ)ったのだ。

手強い相手であった。
動物とはいえ、本気で戦った相手。
畏敬の念を抱かずにはいられないアリーナであった。

戦いは終わった。
しかし、アリーナにはまだ、為すべき事が残されていた。
感傷に浸っている暇はない。

「よっ、と‥‥」

山猪の両の前足を肩越しに持ち、その巨体を後ろに引きずるようにして、アリーナは歩きだした。

「よーし、今夜はご馳走だ！」

＊

「‥‥」

細く割った木の枝。
草。
木の枝。
草。

赤ちゃんの頭より一回り小さいぐらいの石を、正方形に４つ並べたその真ん中に、木の枝と草を、規則正しく重ねてゆく。

良く動く、大きな瞳。
真剣な面持ち。
薄緑色のカーリーヘアー。
体にぴったりと密着した、まるで空の色のような、濃い水色の服。
しゃがんだ、小柄な少女。

世界を救うべき、伝説の勇者。
奇跡の天空混血児（セレスティアン・ハーフ）。
「竜の娘」ディラジーナである。

もっとも、彼女を知る者で、その名で彼女を呼ぶ者はいない。
彼女には「ディル」という愛称があった。そして彼女は、生来、育ての親からそう呼ばれて育ってきたのだ。
彼女が、自らの真の名を知ったのは、その育ての親のいまわの際‥‥村が滅び、ひとり孤独な旅に出た、その時であった。

「こんなもんかな」
呟くと、ディルは、傍らのガラス瓶を手に取り、蓋を開け‥‥

中身の透明な液体を、枝と草を重ねたものの上に、まんべんなくかけてゆく。

「‥‥で」
再び瓶に蓋をし、自分の後ろに置くと、右の人差し指を枝と草に向け、一言。
「メラ」
ディルの指から、小さな火の玉が、枝と草に向けて飛ぶ！
ぼっ！
たちまちのうちに、注いだ液体‥‥つまり、油に火がつき、
枝と草を乾かし、燻(いぶ)し‥‥

そして、油が燃えつきる頃、枝に火がついた！

「よし！」
にっこりと微笑み、後ろを向いて叫ぶ。
「火、つきましたー！」

程なく、向こう側から、大きな鍋を両手で抱えた男が、これまた大きな腹をゆさゆさ揺らしながら、ややおぼつかない足取りで歩いて来る。
「ほいほいー、ちょっとごめんなさいよ」

トレードマークの青と白のシャツ、臙脂(えんじ)色のベストに身を包み、それと同じ色の浅帽(カプッチオ)をかぶった、この男。
故郷の武器屋の日雇いから身を起こし、一代でエンドール・ボンモール両国の王家御用達商人にまで登りつめた、希代の商売人。
そして、この一行(パーティ)の、最大の資金提供者(スポンサー)。
レイクナバのトルネコである。

「あ、手伝いますよ、トルネコさん！」
ディルは、手に持った残りの枝と草を火にくべると、立ち上がり、たたたーっ、と、トルネコに駆け寄った。

「よっこらせ‥‥と」
二人で、ちょうど、四つの石が台になるように、ゆっくりと、鍋を置く。

野営の際など、石と草と木の枝さえあれば簡単に作れる、簡易かまど。
ディルたちと合流する前に単独冒険行(ソロ・アドベンチャー)の経験を十分に積んでいたトルネコが、この一行

にもたらしたものである。

　作るのも簡単なら、後始末も簡単。
　さらに、火炎魔法（ファイアソーサリー）を使えるメンバーが２人もいるこの一行ならば、点火時の火口（ほくち）すら不要なのは、今見た通りだ。
　ディルたち一行にとって、実におあつらえ向きであると言えよう。

「ふぃー‥‥」
　かまどの前にどっかと腰を下ろし、ハンカチで汗をふくトルネコ。
「いや〜、さすがに重かった。はっはっは」
　大きな腹を揺すり、豪快に笑うと、濃紺の口ヒゲの下から白い歯がのぞく。

　各国の武器屋、そして王家にまで影響を持つ立場になっても、今なお夢と冒険心を捨てぬトルネコ。
　コナンベリーでディルたちと合流して以来、彼の経済力と知名度、そして知恵と勇気が、パーティを幾度救ったことか。

　そして、それのみならず、彼は、そのユーモラスな風貌と口調を活かし、しばしばパーティ内の揉め事の調停役を買って出ていた。
　ちょっとしたいさかいがあっても、トルネコが
「まあまあ、ここは私のこの腹に納めて‥‥」
などと言ってなだめると、誰も何も言えなくなってしまうのだ。

　もちろん、この辺は、商人としての人付き合いのテクニック、そして「大人」としての精神的余裕のなせる技なのであろう。

＊

　鍋の中には、水。
　そしてその中に、木の実やら、まるく太った地下茎（つまり「芋」だ）やら、キノコやら、いろいろと雑多なものが放り込まれている。

「うわー、なんか今日は豪華ですね！」
　鍋を覗き込んだディルが、目を丸くして、喜びの声を上げる。
「今日は、山の幸当番のみなさんが頑張ってくれましたからなあ。はっはっは」

トルネコも、嬉しそうに答えた。

食物や飲み水の確保。
言うまでもなく、荒野(ウィルダネス)を旅する冒険者(アドヴェンチュラー)にとって、これはまさに「生命線」である。

ディルたち一行は、この重要な仕事に対して、持ち回りの「当番制」を敷いていた。
すなわち。
・山の幸当番：木の実や野草の確保、獣や野鳥の狩り
・川の幸当番：釣り、および飲み水の確保
のふたつである。

もちろん、その旅する場所によって、「川の幸当番」が「海の幸当番」になったり、その辺は臨機応変にローテーションを行っている。

「当番」が採集した食物は、最終的にトルネコが確認し、彼が食用に適すると判断した物だけが、彼らの食卓に上る。

野生食材に含まれる毒。
それは、人間が何かを食さねば生きられぬ動物である限り、完全に避けることは難しい。そのうえ、その破壊力は、彼らが簡単に全滅しかねないほど強力だ。
ある意味、化物(モンスター)より恐ろしい「敵」である。

長い間の単独冒険行(ソロ・アドベンチャー)と、多くの人との交易(トレード)で得た、野生食材の豊富な知識。
有毒な食物から一行を守るため、ここでもトルネコの幅広い知識が生かされているのだ。

「今日の当番は‥‥えーと‥‥誰だっけ‥‥」
指折り、ローテーションを確認するディル。
「山がマーニャさんにミネアさんにアリーナ、川がクリフトさんにブライさん。か」

今回のガーデンブルグまでの山岳地帯の旅では、原則的に、山の幸当番が３人、川の幸当番が２人の割り当てとなっていた。
食材全体に責任を持つトルネコは、全ての食物に目を通さねばならないため、採集当番を免除されている。その代わり、彼は毎食、料理当番を請け負っていた。

当番の割り当てからあぶれた（トルネコ以外の）２人のうち、１人がトルネコと一緒に料理当番。そして１人が完全休養日となる。
休養も時には必要なのだ。

ディルの言う通り、今日のローテーションは、山の幸当番がマーニャとミネアの姉妹とアリーナ、川の幸当番がブライとクリフト。料理当番がトルネコとディル、ということになる。ライアンは休養日だ。

＊

「さて、そろそろ追加分の皮むきが終わる頃じゃあ‥‥」
と、トルネコが言いかけたところで、向こう側から、再び、ぱたぱたと足音が聞こえて来た。

「お待たせー、追加分だよー！」
「ごめんなさーい、遅くなっちゃって」

元気な声と共に、両手に大きなザルを抱えた女性が２人、小走りにやってきた。

「よっ、と！」
どざざざざー。
前を走っていた女性が、無造作に、ザルの中身を鍋に滑り込ませる。

薄紫色（ペールパープル）のロングヘア。
胸当て（ブレスト）と下履き（スコート）、それに銀色の冠（ティアラ）だけ、という、あまりに開放的なファッション。
しかし、それが決してエロティックに見えない。

コーミズのマーニャ。
偉大なる錬金術師エドガンの長女。
モンバーバラの劇場（テアトロ）を沸かせた希代の踊り子（ダンサー）にして、炎を意のままに操る炎術士（ファイア・ソーサレス）。
明るく輝き、時に激しく燃える、文字通り「炎」の女性である。
そんな彼女は、パーティのメンバーにとっての「活性化因子（アクティベーター）」であり、また、特に若いディルやアリーナにとっては、共に悩み、心からの助言をくれる、良き「お姉さん」であった。

「もう、姉さんたら‥‥もうすこし丁寧に入れられないの？」

後ろを走っていた女性は、たしなめるような口調で言いながら、こちらはザルの中のものをひとつずつ手でつかみ、鍋に入れてゆく。

マーニャと良く似た薄紫色のロングヘア。ただ、マーニャと違って、前髪をアップにしている。
橙色（オレンジ）の長布を体に巻きつけただけのように見える、エキゾチックな服。
落ちついた、湖水の色をたたえた瞳。

コーミズのミネア。
エドガンの次女、マーニャの妹。
「占い師（フォーチュンテラー）」としての経験と回復の呪文で、パーティのメンバーを心身ともに癒す。マーニャがパーティの「姉」ならば、ミネアはパーティの「母」といえよう。
優しい聖母の微笑をたたえた、しかしその中に、凄絶な真空の刃を操る「風使い（ウインドマスター）」としての実力も隠し持った女性である。

「いいじゃん、別にこぼしたり落としたりしてるわけじゃないんだし」
澄まし顔で、姉が言う。
「あんまし細かいこと気にしてると、婚期逃すよ」
「‥‥姉さん、それ、思い切り自分で自分の首締めてると思うんだけど」
冷ややかな目で、妹がやり返す。

別に、本気で嫌味を言いあったり、口喧嘩したりしているわけではない。
お互いに、どこまで攻め込めるか、どこで引くか、それを熟知したもの同士にしか出来ないやり取り。
これが、幼い頃からずっと一緒に生きて来た姉妹の、いわばスキンシップなのだ。

「うわあ！」
ディルが、目を輝かせ、再び驚きの声を上げる。
鍋の中が、一段と豪華になっているのだ。

マーニャのザルの中には、彼女が摘んだ野草が。
そして、ミネアのザルの中には、彼女が掘り出し、皮をむいた芋が入っていた。

「本当に豪華ですね、今日！」

「でしょー」
　喜び顔のディルに、マーニャがウインクする。
「頑張っちゃったもんね、あたしたち」
「良く言うわよ。野草摘みより芋掘りの方が大変だったんだから」
　ミネアが、長い箸で鍋の中の芋をならしながら、澄まし顔で言った。

「ううっ‥‥ディルぅ‥‥」
　がばっ！
　マーニャが、明らかに演技だと分かるほど、大げさに悲しそうな顔をすると、やおら、ディルに抱きついた！
「この悪いお姉さんが、私のことをいぢめる〜」
　嘘泣きの涙声で、言う。

「あの‥‥」
　抱きつかれたディルが、真剣な瞳をマーニャに向けた。
「私も、野草摘みよりも芋掘りの方が大変だと思います」

「‥‥どうしてそーゆー面白くないこと言うかね、この娘は」
　ぎゅうー。
　マーニャが、憮然として、ディルの両頬をつねる。
「痛(いた)い痛(いた)い！　マーニャはん、痛(いた)いれふー！」
「やめなさいよ姉さん、大人げない！」

「あ、そうだ」
　両の頬をつねられたまま、ディルが何かに気がついた表情で、言った。
「？」
　マーニャが手を緩める。
「何だい？」
「アリーナは？」
「あれ、まだ帰って来てない？」
「『帰って来てない？』って、マーニャさんたち、アリーナと一緒じゃなかったんですか？」
「いや、それがね‥‥」
　マーニャに代わって、ミネアが続ける。
「途中で、あの子ひとりだけ、どこかに行っちゃったのよ」
「どこか、って‥‥」

「それが、ずっと地面を見てたと思ったら、突然『先に帰ってて！　私も必ず戻るから』って、走って行っちゃったのよ」
「あたしとミネアが止める暇もなく、すっ飛んでっちまったよ」

「なんか、ひとりになりたい事情でもあったのかなあ‥‥」
　悲しげな表情のディル。

「‥‥心配？」
　優しい瞳で、ディルの顔を覗き込むマーニャ。
　仲間の精神状態に細かく気を配り、沈んだ心を明るく照らし、暖める。マーニャの炎は、他者を焼き尽くすばかりのものではないのだ。

　こくっ。
　ディルは、ただうなずく。そして言った。
「アリーナ、大丈夫ですよね？」
「だーいじょうぶだーいじょうぶ！ あの娘なら殺しても死にゃしないって。それに」
　マーニャが明るく言う。そして、少しだけ真剣な目をして、付け加える。
「あの娘は、自分ひとりで何でも抱え込むような娘じゃない、とあたしは思うんだ。なんか問題があるんなら、あんたなり、あたしなり、ミネアなり、クリフトなりに相談するんじゃないか、って。そのための仲間だろう、って、あの娘も分かってると思うんだ」

　ミネアも、同感なのだろう。横でうなずいている。
「ですな」
　一言だけ、トルネコが言った。

　マーニャも、ミネアも、トルネコも、ディルの言わんとしている事を、正確に理解していた。
　「大丈夫」ですよね、とディルが訊いたのは、「危険な目に遭って、帰って来れないってことはないですよね」という意味だけではない。「自分ひとりで何か抱え込んで、私たちに言えなくて、それで帰って来ない、ってことはないですよね」と言う意味でもあった。
　同い年の、生涯最大の親友を、ディルはまさに我が事のように気遣っていたのだ。

　くしゃくしゃっ。
　マーニャが、ディルのくせっ毛を自分の指に絡めるように、頭をなでる。
　こうするとディルが喜ぶのを、マーニャは知っていた。
　そして、改めてもう一度、言う。

「心配しなさんな、って。あの子は大丈夫だ」
「はい‥‥そうですね」
　少しだけ、ディルの表情に明るさが戻った。

「でも、クリフトが帰って来たら、聞いてみたほうがいいわね、姉さん」
「‥‥そうだね」
　マーニャとミネアがそんな会話をしていた時。

「おーい！」

　遠くから、若い男性の声が聞こえて来た。

「ただいま戻りましたー！」

＊

「あらら‥‥噂をすれば何とやらだ」
「まるで、測ったみたいなタイミングね」
　マーニャとミネアが苦笑する。

　遠くから、二人の人間のシルエットが近づいて来る。
　ひとつは、細い、やたら背の高い影。
　もうひとつは、小柄な男性の影である。

　ディルにも、マーニャにも、ミネアにも、トルネコにも。
　それらが誰の影であるか、分かっていた。
　もちろん、背の高い影のその一部は、持ち主の帽子の影である事も。

「クリフトさーん、ブライさーん、おつかれさまー！」
　ディルが、大声で言うと、力いっぱい手を振った。

＊

「申し訳ありませんっ！」
「‥‥面目ない」

川に魚釣りに行っていた二人が、戻ってきて最初にしたこと。
それは、謝罪であった。

「まさか、一匹も釣れないなんて‥‥」
申し訳なさそうな顔の、若者。

緑色の僧服に身を包み、サントハイム王家の紋章が入った丈の高い独特の帽子を頭にかぶっている。
深い青色の髪の、真面目そうな青年。
パーティになくてはならない、回復魔法の使い手。
サントハイム聖教会正神官にして、王女アリーナ付きの神学講師、クリフトである。

もっとも、「神学講師」と言っても、彼はただ、アリーナに神学を教えているだけではなかった。
常にアリーナの意見を聞き、アリーナと共に考え、アリーナともに悩む。
アリーナと共に歩む存在であることを、クリフトはいわば「義務づけられて」いた。

いずれ、彼は、義務でなく、自らの意志で、自らの想いで、死が二人を分かつまで、アリーナと共に人生を歩む、その決意をすることとなる。
が、それはまだ先の話であり、今の彼は、自分の心の奥底に小さく燃える、自らの主君に対する熱い想いに気付いていない。

一方‥‥

「こやつはともかく、儂まで坊主とは‥‥まったく、焼きが回ったものですな」
苦々しげな口調で言う、小柄な老人。

頭の真ん中が禿げ上がり、両端に残った白髪が、斜め上に逆立っている。
白い口ひげと顎ひげ。
役職で言えばサントハイム王家の侍従長、そして、アリーナの神学以外の学問、生活の全ての教育を一手に任された男。
ブライである。

現王ベルンハルトの父、今は亡きアレクサンデル四世の代より、サントハイム王家に仕

えて四十余年。
　まさに、サントハイム王家と共に歩んだ男だ。

　彼は、この世に数名とはいない、凍結魔法(フリーズソーサリー)の使い手でもある。
　かつて、彼がサントハイム王国魔道兵団の団長であった頃、王国が大きな戦乱に巻き込まれたことがある。その際、彼は、魔法による猛吹雪で、数万に及ぶ侵略軍を足留めし、行動不能に陥らせたと言われている。
　それ故、その異名を「凍嵐の魔人」と呼ばれているわけであるが‥‥

　当の本人は、そのことを訊ねても、
「なあに、もう遠い昔の事じゃよ」
　とか、
「はて、そんな事もあったかのう」
　などと、のらりくらりとかわすだけ。結局のところ、誰もその事実を直接彼から聞くことはできずにいたのであった。

　だが、彼の魔法と、その長年の人生で得た経験と知略は、彼をマーニャと並ぶ魔法攻撃の要として、そして戦闘の際の作戦参謀として、パーティにとって欠くべからざる存在としていたのである。

　そんな彼であるが、実はもうひとつ、釣りの名人、という隠れた側面も持っていた。
　彼の釣りの腕が、ただでさえ食材が不足がちな一行を、陰ながら助けていたのである。

　それだけに、今日の釣果(ぼうず)ゼロという結果は、ブライにとって、少なからずプライドを傷つけられる、不本意なものであった。

「まあ、今日は野草や木の実が多いんで、いいでしょう」
　トルネコの言葉に、へこんでいた二人も、少しは救われたようだ。
「そうそう、あたし達に感謝する事ね」
「だから、私の方が大変だったんだってば」
　また、先ほどの話を蒸し返すマーニャとミネアであったが‥‥

「そうだ！」
　ディルが声をあげた。

「クリフトさん、ブライさん‥‥アリーナがまだ帰って来てないんです」
「姫様が？」
「ほう」
　それぞれ、短い返事を返す。

「‥‥というわけなんです」
「ねえ青年、アリーナから何か聞いてないかい？」
「その『青年』というのはやめて下さいって言ってるでしょう。もう」
　マーニャの問いに、やや憮然とした顔で、クリフトが答える。
「最近、姫様から何か相談されたことはありません。悩んでらっしゃる様子も‥‥特に無かったように思います」
「儂にも何も‥‥ディル殿、お主にも姫様は何もおっしゃらなんだか」
「はい‥‥」
「あたしたちにも、なーんにも」

「‥‥」
　お手上げだ。
　全員で、溜め息をつく。

　と、その時。
「いえね、ちょっと気になってたんですがね」
　トルネコが、突然、口をはさんだ。

「？」
　皆の耳目が、トルネコに集まる。

「いや、まあ、そんなに注目してもらうようなことでもないんですが‥‥マーニャさん、さっき『ずっと地面を見てたと思ったら、突然『先に帰ってて！　私も必ず戻るから』って、走って行っちゃった』って、言ってましたよね？」
「ああ、そうだけど」
「だったら」
　トルネコが、右の人差し指を立てる。
「足跡ですよ」

「足跡ぉ？」

　全員一致で、驚きの声。

「そう。たぶん、アリーナさんは、地面に付いた、動物の足跡を追いかけて行ったんですよ。獲物を探してね」

　王女であるアリーナだが、このパーティでは他のメンバーと対等の「仲間」だ。だから、トルネコも「さん」付けで呼んでいたし、ディルやマーニャ、ミネアは呼び捨てにしていた。形式張って呼ぶのは、彼女に仕えているブライとクリフト、そして他国の武官であるライアンの三人だけであった。

「まあ、そういう単純な話だったらいいんだけどさ」
　マーニャが苦笑混じりに言う。
「でも姉さん、もし本当にそうだとしても、これだけ帰りが遅いってのは‥‥」
「本当に、アリーナの身に何かあったんじゃ‥‥！」
「だから、ディルは心配しすぎだって」
　泣きそうなディルをなだめながら、マーニャが言う。
「あの子だってバカじゃないんだ。自分の限界は分かるだろうし、本当にヤバいと思ったら、キメラの翼で帰って来るさ」

　アリーナは‥‥そして他のメンバーも、非常脱出のための最後の手段として、懐に一枚、お守り代わりに「キメラの翼」を忍ばせていた。
　冒険中は常に最悪の事態を想定する‥‥これもまた、トルネコの教えである。

「だといいんだけど‥‥」
　うつむくディルの傍らで‥‥

「あ、あーっ！？」

　突如、クリフトが、素っ頓狂な声を出した！
「うわっ！？」
「どうしたの、クリフト？」
　マーニャが驚き、ミネアが、怪訝そうな顔でクリフトに訊く。
　が、クリフトは、
「あ、あれ、あれ‥‥」
　と言って、前を指差して、口をぱくぱくさせるのみである。

一堂は、クリフトの指差した方向を見て、そして、

「あ、あーっ！？」

と、彼と全く同じ叫びを上げた。

夕陽をバックに、そのシルエットが見えた。
なにかが、歩いて来る。

人ではあり得ない曲線で構成された、その巨体！

「あれは‥‥？」
「野猪（ワイルドボアー）！？」
「いや、もっとデカい。山猪（マウンテンボアー）ですな」

「儂は、もう七十年生きとるが‥‥」
ブライが、いつもの口調で言った。
「二本足で立って歩く山猪を見るのは生まれて初めてじゃ」

「っていうかさ‥‥」
マーニャが、遠い目をして、言う。
「普通、山猪って、立って歩かないよね？」
姉と同じ表情で、ミネアが答えた。
「普通じゃなくても立って歩かないわよ」

間抜けな会話を交わす姉妹の横で、ディルが、ぼそっと言った。
「あと、あんな風に、手を振る事もないと思います」

確かに、その山猪とおぼしきシルエットは、歩きながら、こちらに向かって手を振っていた。

そして、彼女たちの耳にその声が届いたのは、その直後だった。

「ごっめーん！ こいつと戦ってたら遅くなっちゃった！」

＊

暮れなずむ平野。
かまどの火が、八人と馬車を照らす。

他のメンバーがぐるっと周囲に立った、その真ん中で。
サントハイム王女、誇り高きアリーナ・フォン・サントハイムは、正座させられていた。

輪の外に、アリーナが両の前足をかついで引きずって来た（だから、遠目には歩いているように見えたのだ）山猪が横たわっている。

アリーナは、道すがら、山猪の足跡を見つけ、マーニャ・ミネアと別れてそれを追っていったのである。
そして、足跡の主であるこの山猪と遭遇し、先ほどご覧いただいた通り、死闘の末、必殺の〈杭（ブフレック）〉でこれを撃破したのであった。

「ごめんなさい、反省してます」

しょげるアリーナの首っ玉に、ディルが抱きついたまま、ぐすんぐすんと泣いていた。
アリーナが帰って来た途端、真っ先にアリーナに飛びつき、泣き始めたのだ。

「アリーナ‥‥アリーナ‥‥心配したんだから‥‥」
そう言って、親友に抱きつき、泣きじゃくるディルを見て、
（まるで、戦地から帰って来た夫を迎える妻のようじゃ）
と、ブライは思った。
もちろん、彼がそれを口にすることはなかったが。

そして、「反省会」に突入してからも、ディルはアリーナから離れずにいるのだった。

「まあ、ひとりで別行動を取ったのは、いいとしよう」

反省会の司会は、マーニャである。
本来は最長老のブライ、あるいはライアンあたりがまとめるのが筋かも知れない。
が、ことディルとアリーナの問題を話し合う際には、相手が多感な思春期の少女と言う事もあり、マーニャやミネアが場をまとめることが多かった。

「本当は、良くないのよ。心配したんだから」
　ミネアが付け加える。

「はい‥‥」
　しょげたまま、アリーナ。
　ディルは手で涙をぬぐっている。だいぶ泣き止んで来たようだ。

「こんな大物（デカブツ）と勝手に戦ったのも、結果的には無事に帰ってきたから、よしとしよう」
「本当は良くないのよ。あんなに怪我しちゃって」

　アリーナの怪我は、クリフトの魔法で完全に回復している。
　さすが神官だけはあり、ミネアとディルを含めた回復魔法を使える三人のうち、クリフトの魔法が一番「効き」がいいのだ。
　もっとも、これには、クリフト自身の無意識の「想い」が影響している‥‥のかも、しれない。

「ごめんなさい」
　アリーナはずっと平謝りである。
　ディルも、ほとんど泣き止んだ。

「ただね」
　マーニャが、苦い顔をする。
「あたし、出かける前に言ったよね。明日かあさってにはガーデンブルグに着くから、それぐらいで食べ切れるぐらいの分を取って来よう、って」
「はい」

「それじゃあ訊くけどね。あんたは‥‥」
　ばっ！と、右手で横たわる大きな肉塊を指し示す。
「あのバカでかいイノシシを、八人でどうやって一日〜二日で食べるつもり？」

　確かに、大きかった。
　大の大人が八人で食べても、食べ尽くすのに恐らく四・五日はかかる量。それほどの肉を、この山猪は身につけていたのである。

「それは‥‥みんなで頑張って‥‥」
「人間には、限界ってもんがあんの！」
　マーニャが怒鳴る。
「あんたとかディルみたいに、育ち盛りの大食らいばっかりじゃないんだから！」

　アリーナとディル。
　確かに、この二人、この小柄な体にどうしてこれほど入るのか、というぐらい、たくさん食べる。
　トルネコと同じぐらい食べる、というと、その量の多さがお分かりであろう。

　もっとも彼女たちの場合、その滋養は、トルネコのように脂肪として蓄積されるのではなく、日々急成長する肉体の構成要素となり、そしてまた、彼女たちが尋常ならざる運動量で消費したエネルギーを補うのだ。

「うう‥‥」
　しょんぼりとうなだれるアリーナ。

　厳しい目で彼女を見ていたマーニャの、その目線が、ふと、緩む。
「ま、こんだけの大物を苦労して獲(と)ってきて、叱られてたんじゃあ割に合わないか。これぐらいにしとこうか」
　マーニャの言葉に、アリーナの表情にも安堵が浮かんだ。

　マーニャが、くるっと後ろ‥‥山猪の方を向いて、続ける。
「とりあえず、こいつをバラして、食べられるだけ食べて、あとの事はその後だね。腹が減っちゃあ何とやら、だ」

　さすがに、責任を感じたのだろう。
　山猪の解体はせめて自分がやろうと、アリーナが立ち上がる。
「あ、私が‥‥」

　しかし、その声は、全く予想していなかった人物の言葉により、遮られた！

「よければ、私がやろうか」

＊

アリーナも、ディルも、山猪の方を向いていたマーニャも、その声に振り向いた。
焚き火の光に浮かぶ、その影（シルエット）。
黒い袖なしのシャツに、白い膝までのズボン、という、ラフな格好。
炎に照らされる、褐色の引き締まった筋肉。
短く刈り揃えられた黒い髪と、それと同じ色の、良く手入れされたカイゼル髭（ひげ）。
左手には、鞘に入ったままの長剣（バスタードソード）。
右肩に、束ねたロープを、巻きつけるように担いでいる。

東方の陸軍王国、バトランドの王室親衛隊「王宮戦士（パレスウォリアーズ）」。
文字通り「一騎当千」と謳われる、その精鋭部隊のうちのひとり。
「伝説の勇者を探し、守るべし」という王の命により、特例として、王宮での常勤の任を免ぜられ、世界を旅する「特務王宮戦士（パレスウォリアー）」。

卓越した剣士であるとともに、類い稀な陸戦戦術指揮官でもある。
薄紅色の鎧、そしてその勇猛果敢な戦い。ゆえに二つ名を「薄紅の獅子（レオ・ロゼウス）」。

勇者たちを守る「パーティの盾」を自任する男。
ライアンである。

「ライアンさん！」
「あれ？　大将（ライアン）、今日は休みじゃなかったっけ？」
ディルの、マーニャの声が飛ぶ。

確かに、ローテーション上、ライアンは、食材採集、調理など、全ての当番から外され、休息できるはずの日であった。
しかし‥‥

「いや、ちょっと試し斬りをしたいと思ってな」
軽く笑いながら、左手の剣をわずかに持ち上げる。
「試し斬り‥‥この山猪を？」
「うむ。ちょっと思い付いた技があってな。いきなり実戦というわけにもいかんから、斬るものを探していたというわけさ」
「でも、それ、本当に大丈夫なんだろうねえ？」

　マーニャが、ちょっと不快そうな顔をする。
「大将（ライアン）の技はえげつないからねえ。全部ひと口大の肉片になっちゃった、なんてのは、御免だよ」
　己の呪文の破壊力を棚に上げて言うマーニャに、ライアンは変わらぬ口調で答える。
「なあに、心配ご無用だ。この‥‥」
　山猪の巨体を木に立てかけ、器用にロープでぐるぐる巻きに結わえながら、言う。
「前脚と後脚の付け根の関節を切り落とす。そして首。最後は腹を切って臓物を出す。それならば良いだろう？」
「‥‥まあ、いいでしょ」

　山猪を結わえたロープの端を、木の枝を越えるように投げ上げ、引っかける。
　反対側に落ちてきたロープを思い切り引っ張る。
　あっという間に、山猪は宙づりになった。

　いつしか、パーティの全員が、木の回りに集まっている。

　ロープの端を木の幹に結びつけながら、ライアンが再び口を開く。
「実は、剣速をもっと速くしたいと思ってな。いろいろ考えていたのだが‥‥」

　現在でも、既に「隼斬り（ファルコンアタック）」「真空波（エアーエッジ）」「さみだれ剣（レインブレード）」などの苛烈なる剣技を使いこなすライアン。
　これらの技には、当然、文字どおり空を裂くほどの剣速が必要である。
　すなわち、ライアンの剣は、既に、真空を生み出すほどの速度を身につけていたことになる。
　にもかかわらず、それでいてなお、更なる遥かな高みを目指す。
　この向上心こそが、ライアンを世界最高の剣士たらしめているのであり、同時に、この一行の他の面々の鑑（かがみ）として、その成長を促している、大事な因子（ファクター）なのであった。

「この剣の重み自体で剣を加速すれば、少しは速くなると思うのだ」
「剣の‥‥」
「重み、自体‥‥？」
　とりわけ真剣に聞いていた二人‥‥ライアンの直弟子であり、彼に次ぐ剣の腕の持ち主であるディルと、神官学校で剣の訓練を受け、今もその背に秘宝「奇跡の剣（ヴンダーシュヴェルト）」を背負うクリフトが、相次いで反応する。
　この二人にも、まだ、ライアンの言葉の真意は分からない。
「簡単な事だ。普通、鞘に収めた剣は、こう、柄（つか）を上にして持つな」

　柄を上に向け、手に持った剣を前に出す。
「これを、柄を下にすると‥‥どうなる？」
「中身が滑り出してきちゃうんじゃ‥‥」
「御名答だ、勇者(ディル)殿」
　笑いながら、ライアンは、鞘を上下ひっくり返した。
　するっ、と鞘から滑り出す刀身。
　その柄を、右手で受ける。

　にこっと笑う小さな勇者に、
「まあ、これは誰でも分かる」
　と、少し意地悪をいう剣士。
「むー」
　少しふくれるディル。こんな小ネタにいちいち反応してしまうから、マーニャあたりの格好のからかいの種になってしまうのである。

「だが、この誰でも分かる事が、本当は誰も分かっていないのかも知れん」
　また謎めいたことを言う。
「まあ、論より証拠だ。見てみてくれ」

　くるっ、ときびすを返す。
　斬られるのを待っている、宙づりの山猪。

　その、右肩のあたりを、じっと睨む。

　鞘を持った左手を、左腰のあたりに下げる。
　柄に右手を添える。

　自然な、流れるような動き。
　しかし、それだけに、逆に熟練の業を感じさせる。

　沈黙。

　ごくり。
　誰かの喉が鳴る。

　柄頭が、わずかに下がる。

そして、白刃が、重力に引かれて鞘から滑り出す、その刹那‥‥

「かあっ！」

獅子が吼えた！
同時に、右手で一気に鞘から剣を引き抜く！
焚き火の炎を映した朱色（ヴァーミリオン）の輝きが、雷光の速度で、一直線に山猪の右肩に伸びる！

バシュオッ！

山猪の前脚を支える屈強な靭帯群が、一撃の元に切断された！

どん、どどん‥‥

鈍い音を残し、体から離れた前脚が、地面を跳ねる。

「！」
「うわ！」
「すご‥‥」

口々に、驚きの声が上がる。
今の一撃は、確かに、今まで見るライアンのどの剣撃よりも、速かった。
いや、正確には、「隼斬り（ファルコンアタック）」「真空波（エアーエッジ）」などの必殺技を除く通常のどの剣撃よりも、である。
ということは。
もし、このスピードが、これらの必殺技にも応用できたとするならば‥‥

間違い無い。
今、ディル達の目の前にいるこの武人は、まさにまぎれもなく、世界最速の剣の持ち主であった。

かちっ。
「ふう‥‥」
剣を鞘に収め、息をつく。
「柄を下げ、剣の滑り出る速度を剣速に加える。引き出す力も小さくて済む。これぞ一石

二鳥の極意‥‥いかがかな」

　自信に満ちた顔で、ライアンは言った。

「すっごーい！」
　最初にはしゃいだのは、己のスピードを最大の武器にしている格闘王女、アリーナであった。
「すごいよライアンさん！　あのスピードから隼斬り（ファルコンアタック）とか出されたら、私もかわせないかも知れない！」
「貴方がそう言うのなら、少しは自信を持っていいのかな。王女殿（プリンセス）」
　ほんの少し、笑顔がほころぶ。
　漢（おとこ）の顔。
　常に前に進もうとする、真の武人の笑顔であった。

　蛇足ではあるが。
　この、「鞘から刀が出る際に加速する」という、いわば鞘をカタパルト代わりにするという考え。
　実は、これは、我々の住む世界、しかも我々が住むこの日本で、既に数百年の昔に実用化されている技術である。
　鞘から刀を抜く時の加速、すなわち「鞘走り」を利用し、一瞬で抜刀して敵を斬る技術。それは、日本では「居合（いあい）」の名で知られている。
　しかし、抜刀術に適した、湾曲した片刃の日本刀でなく、両刃の直刀で、しかも独力でこの境地にたどりついたライアンの技術と魂は、やはり驚嘆すべきものなのだ。

「残りの足を落としたら、すぐに焼けるぞ。そろそろ準備をした方がいい」
　彼の一言に、ふと、その場の全員が我に返る。

「おっと、こんなことをしてる場合じゃあないですな。焼き串焼き串」
「鍋の方、いい感じで煮えてます！」
「アリーナ、何で腹筋運動なんかしてるの？」
「決まってる‥‥でしょ！‥‥少しでも‥‥お腹を‥‥すかさなきゃ‥‥」
「姫様、ここは邪魔じゃて、やるなら他の場所でやりなされ」

＊

「いただきまーす！」
　元気な声が、野原に響く。

　本日のメニュー。
　山猪のロースト。
　野草と木の実のスープ。

「おお、うまく焼けましたな」
「イノシシなんて、久しぶりよねえ」
「たくさん食べないと‥‥がつがつ」
「姫様、あまり急いで食べると、ノドが詰まりますよ」

　そんな平和な会話の中。
　その異変に最初に気がついたのは、果たして誰であったのか。

「ディル‥‥？」
「どうしたんですか？」

　ディルの食が、進んでいない。
　さっきから、ほとんど、肉にもスープにも、口を付けていない。
　泣きそうな顔で、テーブルを見つめている。

「ははーん」
　マーニャが、いつもの、いたずらっぽい笑顔を浮かべ、ディルに顔を近づける。
「なんか、悩んでるな」
　こくっ。
　ディルが、小さくうなずいた。

　ディルとアリーナの精神的ケアは、マーニャとミネアの仕事である。
　特に、どちらかというと内向的な傾向のあるディルには、明るいマーニャが、そして、感情を表に出しやすいアリーナには、落ち着いたミネアが、それぞれ悩みの聞き役に回ることが多かった。

　マーニャが、両の掌で、ディルの頬を挟む。
「あたしに言える？」

人懐っこい瞳が、ディルを見つめる。

その微笑みと、掌の温もりは、ディルに、いつも、無限の安心感を与えてくれる。
血縁のいないディルにとって、マーニャは大事な姉なのだ。

「あの‥‥」
ディルは、話し始めた。
「私、これを食べていいのかなあ、って。私に、これを食べる権利があるのかなあ、って‥‥」

＊

「私たち‥‥今まで、いろんな化物(モンスター)たちを殺して、ここまで来ましたよね」
ディルの話を、みんな、真剣な目で聞いている。
「私たちのせいで死んだ人たちも、いっぱい‥‥」
目を伏せるディル。

ディルの育った村の人々は、彼女を殺そうとした化物の大群に、ひとり残らず殺された。
サントハイム城でのバルザック戦。マーニャとミネアの父エドガンの仇討ち、そしてサントハイム王国そのものの解放闘争でもあったこの戦(いくさ)では、その目的は果たしたものの、サランの村人より成る抵抗勢力(パルチザン)、サラン教会の僧兵たち、そしてエンドール・ボンモール・キングレオからの義勇兵たちに、少なからぬ犠牲が出た。

「このイノシシだって、私たちと出逢わなければ‥‥そう思ったら‥‥」

「‥‥ふむ‥‥」
目を閉じ、腕組みをするマーニャ。
「ずいぶんとまた、哲学的な事で悩んでるもんだ」

ディルはまだ、うなだれたまま。

「こういう話、あたしは苦手‥‥青年、後は頼んだ」
マーニャはそう言うと、クリフトにぱちっとウインクを飛ばし、自分の席に座った。

「わ、私ですか！？」
にこにこ笑うマーニャに対し、突然の指名に、慌てるクリフト。

「こういう哲学的な悩みの時は、神頼みが一番！ ってね」
「‥‥」
　ほんの少しだけ、マーニャに不平そうな瞳を向けた後、実直な神官は、ディルの方に向き直り、話し始めた。

「まあ、マーニャの言う事にも一理あります」

　基本的に礼儀正しいクリフトであるが、マーニャやミネアの二人を呼ぶ時だけは、自分より年上にもかかわらず、呼び捨てにしていた。
　それは、他ならぬ本人たちの強い望みがあったからである。

「なんか、若いオトコに『さん』づけで呼ばれるのって、気持ち悪くってさあ」

　などとマーニャは言うが、実のところ、最初の頃あまりパーティになじめなかったクリフトを、むりやりにでもなじませてしまおう、と、彼女たちなりに気を使った結果なのである。

「一理あるんですが‥‥何せいきなりなんで、何を話していいか分かりません」
　苦笑いしながら、ぽりぽり、と、頭をかく。彼の癖だ。

「かっこわるー」
　アリーナが、口をとがらせる。
　そんなアリーナを、ばつの悪そうな表情で見た後‥‥
「そうだ‥‥この話にしましょう」
　何かに思い当たったような口調で、クリフトが話し始める。

「これは、姫様にはかなり昔にお話ししたことなんですが‥‥
　ディル、貴方は『原罪』という言葉を知っていますか？」

「原‥‥罪‥‥？」

　ふるふる。
　首を振るディル。
　初めて聞く言葉だった。

「そうですか‥‥もしかしたら、ディル、貴方の悩みは、この言葉について知る事で、少

しは軽くなるかもしれません」

　優しい笑顔を見せるクリフト。

「神様は‥‥我々人間は、生まれた時から既に『罪』を背負っている、と仰せになっています」

「生まれた時から‥‥」
「罪を？」
　マーニャが、ミネアが、それぞれ口を挟む。
　彼女たちにとっても、この話は初耳だったのだ。

　ディルは何も言わず、真剣に聞いている。

「はい。人間のみならず、生きとし生ける全ての者には、すべからく『罪』がある、と」

「あ、思い出した！　それって‥‥」
　アリーナが叫ぶ。
　彼女には既に話した、とクリフトは先ほど言ったが、当のアリーナ本人は、それをすっかり忘れていたらしい。
「おっと、ネタバレ禁止ですよ、姫様」
「はいはい」
　クリフトがすかさず制し、アリーナは言いかけた言葉を呑み込んだ。

「いいですかディル。神様の御言葉(みことば)によると、この『罪』とは、なんと驚くべき事に、『生きる事』そのものだと言うのです」
「えっ‥‥？」
「なぜ、生きる事が『罪』なのか‥‥分かりますか？」

　ふるふる。
　再び、首を振る。

　分かるわけがない。
　クリフトの信じる神が、人の生命を司るはずの神が、よりによって、生きる事、つまり生命そのものを「罪」だという。
　その真意など、分かるわけがない‥‥

　そう、ディルが思いかけた時。

「‥‥もしかしたら‥‥」
　ディルには、ひとつ、思い当たる事があった。

「言ってごらんなさい。貴方の思うままを」
　クリフトに促され、ディルは言った。

「私たちは、誰かの命を奪わなければ生きていけない、‥‥って事ですか？」

「そう。その通りです」
　再び、微笑むクリフト。
「ディルの言う通り。私たちは、いや、生きとし生けるものは皆、他の誰かの命を奪わずには生きられないのです」

　目を閉じ、話に聞き入るライアン。
　ブライは、ただクリフトを見つめている。

「この山猪も、姫様に倒されるまでは、ひとつの命だった‥‥でも今は、我々の今日の糧となっています」

　クリフトの口調には、淀みがない。

「ですが、この山猪自身、今日まで、他の動物や木の実を、自分の糧として生きてきたはずです。そして、その動物もまた、他の動物を‥‥
　世界は、その繰り返しで出来ているのです」

「世界は‥‥その繰り返しで‥‥」
　クリフトの言葉を繰り返すディル。

「もちろん、他者の命を奪うことは『罪』です。しかし、『罪』を冒さなければ‥‥我々は糧を得られません。『罪』を冒さなければ生きていけないのです」

「だから‥‥『生きる事そのものが罪』なんですね」

「そうです。‥‥ディルは物分かりがいいですね。昔の姫様とはえらい違い‥‥」
　言いかけて、アリーナの刺すような視線に気がつく。
「あー、いやいや。こほん‥‥」
　咳払いして、続ける。

「えー、どこまでお話ししましたっけ‥‥そうそう。『生きる事そのものが罪』。神様の御言葉にある『原罪』とは、まさにこの事を指しているのです。
　そして‥‥だからこそ、我々は、その罪を償わなければなりません」
「罪を‥‥償う？」
「生きるのです」
　クリフトの言葉に、力がこもる。

「ほう」
　トルネコが、軽く声をあげた。

「生きる。生き続ける。そしてただ生きるのではなく、理由なく奪われる多くの命を救うために生きる。それこそが、命を奪い生きる我々が、罪を償う唯一の道。
　神様はそう説いておられます」

「生きる‥‥多くの命を救うために生きる‥‥」

　クリフトの伝える、神の力強い言葉。
　生きる事が、そして他の命を救う事が、罪の償い。
　ディルの胸に、感動にも似た、熱い感情が沸き起こる。

「そうですよ。それが我々の進むべき道なのです」
　そう言って、クリフトは、再び笑った。
　サランの乙女たちがこぞって恋焦がれる、心優しき神の僕の、笑顔であった。

　うん、うん。
　背後で、トルネコが、何度もうなずいている。

「で、ですね。実は、この話には、おまけがありまして‥‥」
　少しの間の後、クリフトが再び切り出した。

「う、やな予感‥‥」
　アリーナが、眉根をしかめる。

「この話を、昔、初めて姫様にしてさし上げた時、姫様、なんておっしゃったと思います？」

「‥‥」
　首をひねるディル。

　眉根をしかめたまま何も言わないアリーナの方をちらっと見てから、クリフトは話を進めた。
「『同感ね。私死にたくないもん』って、そうおっしゃったんですよ」

「ぷっ！」
　最初に吹き出したのは、マーニャであった。
「はははははは、アリーナらしいや」
　お腹を抱え、涙を流して笑っている。

　がたっ！
　アリーナが立ち上がる！
「なによマーニャ姉（ねえ）！　そんなに笑う事ないじゃない！」

「ははは、ごめんごめん」
　涙を拭きながら、マーニャは答えた。
「いかにもあん（アリーナ）たらしい話だったからさ‥‥。でも」
　優しい瞳。
「実は、あたしも同感なんだ」
「マーニャ姉？」
　神妙な顔をするアリーナに、マーニャは続けた。
「死にたくない‥‥ってのは、本当にそう思う。‥‥みんな死んじゃったからねえ」

　そうなのだ。
　彼女の父、錬金術師エドガン。
　そして、エドガンを殺した、彼の第二の弟子、バルザック。
　既に、二人とも生きてはいない。
　殺されたと思っていた、バルザックの兄弟子オーリンが生きていたのが救いであったと

はいえ、彼女に関りのあった人が、次々と死んでいった。しかもそのうちのひとりには、自ら直接手を下している。
　彼女たち姉妹は、バルザックを倒した後、これほどの悲劇をもたらした〈進化の秘法（セクレト・デ・エボルシオン）〉を封印するため、決意を新たにし、引き続きディルに同行していたのである。

「だから、あたしは死なない。絶対に死ぬもんか‥‥そう思ってる」
「そうね‥‥姉さんの言う通り。第二のお父様を、それに第二のバルザックを産まないために、私たちは旅をしているのだから。それまでは死ねないわ」
　ミネアも言う。

　父の仇であるバルザックも、〈進化の秘法〉と出逢うまでは、「善良」とは言えぬまでも、まだ「普通の人間」であった。
　その頃のバルザックを知る姉妹は、敬愛していた父親は言うに及ばず、憎んでいたはずの彼にも、同時に、一種の憐れみにも似た感情を抱いていたのである。

　彼らの悲劇を、繰り返させてはならない。
　マーニャとミネア、二人の決意は固かった。

　そして、もうひとり‥‥

「そそ。死んじゃったら何にもならないしね」

　アリーナ。
　マーニャの同意に、少し機嫌を直したのか、また肉をほおばり始める。
「あの時と同じ。死にたくないもん私。まだやりたい事があるからね。あ、肉取って」

　アリーナもまた、激しい闘いを勝ち抜いてきた。
　テンペでのカメレオンマン戦。
　エンドール王女モニカの人生を背負っての、武術大会優勝。
　サントハイム城解放闘争。
　そして、解放が成っても、いまだ帰らぬ父王、そして城内の兵たち。

　武術家として、王女として、事実上の国家元首として、そして、十七歳の少女として。
　アリーナ個人が背負っていたもの、そして今背負っているもの。それはあまりに重い。

しかし、だからこそ、アリーナは、生き抜く意志を決して捨てないのだ。
それを背負い、逃げずに生き続け、立ち向かい続ける。
「まだやりたい事」をやり遂げようとする意志、それが彼女の「強さ」なのだ。

「‥‥そっか‥‥」
目尻に浮かんだ涙を、指で拭うディル。
今ディルが抱いているような悩みを、マーニャも、アリーナも、もしかするとかつては抱いていたのかも知れない。
しかし、今、彼女たちは、己自身の目的のために、その悩みを乗り越えていた。

明確な、生きる目的。
生き抜こうとする強さ。

それを持っている人々が、こんなに近くにいる。
そして、自分を支えてくれている。
こんなに、嬉しい事があるだろうか？

「勇者(ディル)殿」
ライアンの、落ち着いた声。
「貴方には、〈地獄(エス)の帝王(タ ーク)〉とやらを倒すという大きな使命と、そのための力がある。それを成さずに死んでしまっては、勿体なかろう？」
死ぬ事を「許さない」と言うのではなく、「勿体なかろう」という辺りが、彼の大人の優しさである。

「なあに、ディルさんには私らがついてます。大腹‥‥じゃないや、大船に乗った気でいてくれればいいですよ。はっはっは」
大きな腹を揺すり、トルネコが笑う。

「まあ、その辺はディル殿も姫様を見習われてはいかがかな。必要のないところまで見習われてはなりませぬがな」
「ちょっと、何よそれー！」
普段通りの毒舌を交えたブライの発言に、アリーナが突っかかる。
しかし、その毒舌に隠した真意、ディルに足りないものを補うための的確なアドバイス。それはまた、まさにブライの年の功の為し得る業ではあった。

　パーティーの皆の温かい眼差しを一身に受け‥‥ディルの瞳から、涙が一粒、また一粒、こぼれ落ちた。
「泣き虫（クライベイビー）」ディルは、今日もまた、泣いた。

「みんな‥‥ありがとう‥‥」
　深く、頭を下げる。

「ディル」
　再び、クリフト。
「生きていくことは『罪』です‥‥それを決して忘れずに、生き続けていきましょう」
「はい！」
　涙を振り払い、明るく、答える。

　我らが小さな勇者が、またひとつ、苦難を乗り越えた瞬間であった。

「よし、じゃあ、生きていくために、食べよ！」
「早くお肉を食べないと、アリーナが全部食べちゃうかも知れないわよ」
「もー、ミネア姉まで、私をそうやって悪役扱いするんだから！」

「はい、じゃあ‥‥」
　改めて、周囲を見まわし、目を閉じる。
「神様と、このイノシシさんと、それと‥‥」
　薄目を開けると、アリーナの視線に気がついた。
「獲ってきてくれたアリーナに、感謝して」
　半開きのまぶたの向こう、視界の端に、アリーナの微笑みが、うっすらと見えた。
「いただきまーす！」

＊

「た、食べたーっ！」
　アリーナが、両手を頭上に伸ばすと、一言叫んで、ばたんと後ろに倒れ込んだ。

「もうダメ〜、三日分は食べたね」
「私もほら、お腹がこんなになるまで」
「トルネコさんは元々そんなお腹でしょ」

　何だかんだ言いつつも、山猪の肉は、かなりの部分が、パーティ八人の胃袋に収まり切ってしまったようであった。
　中でも‥‥

「しかし、何と言っても、本日一番の功労者は、この娘だね」
　マーニャが、足元に仰向けに倒れているアリーナを見ながら、言う。
　アリーナの足元には、山猪の肋骨やら脚の骨やらが、無造作に何本も転がっている。

「うう‥‥お腹きつい〜」

　元々大食いのアリーナが、自分で獲ってきた山猪の後始末をしようと、むりやり詰め込んだのだ。その量は尋常ならざる物があった。

「うう‥‥動けない〜」
「‥‥しかし、このお腹の一体どこに、あんだけの肉が入っちゃったのかねえ」
「つついてみましょうか」
「つついたら‥‥殴るわよ‥‥」

「さて、一休みしたら、腹ごなしに、ちょっと仕事をしないか。王女殿(プリンセス)」
　横たわったままのアリーナに、ライアンが声をかけた。

「‥‥仕事‥‥？」
「そうだ。あの余りの肉を、塩漬け(コーンドミート)にしようと思うのだ。その仕込みをな」

　ライアンは、なにか大きな紙包みを、片手に持っていた。
　どうやら、馬車に積んでいた塩のようである。

「幸い、塩はバトランドで大量に仕入れておいたからな。ここからガーデンブルグまでの距離ならば足りなくなる事もないだろうし、だいいち、足りなくなれば、この塩漬け肉を食べればいいのだからな」

　バトランドでは、イムルの海岸で作った塩が、安価に手に入る。
　そのため、ここぞとばかりに、彼らは塩を買い溜めしていたのである。

「ははあ、なるほど。考えたねえ大将(ライアン)」

「これなら、少しは日持ちするものね」
「うむ。時間があれば干し肉（ジャーキー）を作りたいところだが、あと一〜二日で着いてしまうのではな。
　塩漬けでも二日では漬かり切らないだろうが、肉を薄くして塩をたっぷり使えば、少なくとも腐ることはないだろう」
「これはいい。ガーデンブルグの人たちにも分けてあげれば、喜ばれるでしょうなあ」

　これこそが、肉が余ってしまうという懸案を一気に解決する、ライアンの秘策であった。

　肉の塩漬けには、通常、冷暗所で最低四〜五日、通常は一週間程度の熟成が必要である。
　だが、今回、それだけの時間を取ることはできない。そこでライアンは、味よりも保存性を重視する事にしたのである。
　トルネコの言う通り、食べ切れない分は、ガーデンブルグの人々に分ければ良いのだ。売っても良いだろうし、無料ならば、良い「お近づきの印」になるだろう。

「というわけで、この肉をひたすら薄く切り、塩をまぶす。これが仕事だ、王女殿」
「そりゃ、いいけど‥‥」
　ようやく、アリーナが起き上がる。
「どうして、私が？」
「‥‥随分と、皆に心配を掛けたらしいではないか」
「‥‥うげ‥‥」
　変わらぬ口調で言うライアンの言葉に、アリーナの顔が引きつる。
「確かに、強い相手を目にした時の高揚感。これは武人として分からぬでもない」
「でしょ！　でしょ！」
「だが、だからと言って、状況を冷静に判断できなくなるのは良くないな」
「‥‥あう」
　がっくり。
　再び、深くうなだれるアリーナ。
「まあ、今回の罰、ということだな。頑張ってくれ」
　言い残し、ライアンは去っていった。

　締めるべきところは締める。
　パーティの厳しき父親役を、ライアンは買って出ていたのである。

　というわけで‥‥

＊

「‥‥」
　無言。
　真剣な瞳。

　骨に付いた身を、小刀で薄くこそげ取る。
　塩をまぶす。
　重ねる。

　身を薄くこそげ取る。
　塩をまぶす。
　重ねる。

　この単調な繰り返しを、アリーナは強いられていた。
　行動派のアリーナにとっては、拷問に近い作業である。

　他のメンバーは既に、馬車や野原で、寝る準備に入っている。

「う〜〜」
　唸りながら、ちまちまと作業を繰り返していたアリーナであったが‥‥

「うきーっ！！」

　突然、奇声をあげて、髪をかきむしり始めた！

「ダメ！　もうダメ！　もうこんなのイヤーっ！」

　よほど、こういう作業には性が合わないと見える。

　もちろん、ライアンも、それを見越して、アリーナにこの仕事をやらせたのであろう。
　そしてそれは、ライアンの思惑通り、いや、思惑を超えるほど、有効な懲罰として機能していたのである。

「でもなあ‥‥自業自得だしなあ‥‥」

　ぶつぶつ言いながら、再び小刀を手に取るアリーナ。
　孤独な戦いである‥‥。

　しかし、そんな彼女の背後から、孤独な戦いを支える救いの女神が歩み寄ってきた事に、彼女は気がついていなかった。

「アリーナ♪」

　明るい声。
「んにゃ？」
　アリーナが振り向くと、そこには、湯気をあげるマグカップを２つ、それぞれの手に持った少女が立っていた。
「ディル‥‥」

「はい、今日の野菜スープをあっため直したやつ。熱いわよ」
　アリーナの横に座ると、そう言って、マグカップをひとつ、目の前に差しだす。
「うん。サンキュ」
　アリーナが、マグカップを両手で受け取る。
　ずずー。
「あちち‥‥」
「もう、だから言ったじゃない」

　困り顔で言いながら、ディルはふと、アリーナの前に横たわる山猪に目をやる。
　かなり肉がこそげ取られてはいるものの、部位によっては、まだまだ原形をとどめていた。

「だいぶ進んだわね。あと十頑張りってとこかな」
「まーねー‥‥でも、正直、もう限界」
「こういうの、てんでダメだもんね、アリーナ」
「ライアンさん、キツいよねー」
「‥‥自業自得ね」
「否定しません」
　三度、アリーナが肩を落とす。と‥‥

「大丈夫よ。手伝ったげる」
　驚いて顔を上げるアリーナの瞳には、右手に小刀を握ってにっこり微笑むディルの姿が映し出されていた。
「ディル〜〜〜」
　思わずディルに抱きつくアリーナ。
「さすが大親友！　話が分かるわー」
「その代わり、今度の貴方の休み一回分、ちょうだいね」
　しれっと言うディルの言葉に、アリーナの表情が落胆の色に染まる。
「交換条件？　そういうのって、人としてどうかと思うな」
「あら、自業自得で苦しんでいる親友を助けてあげるんだから、これぐらいの代償は当然だと思わない？」
　「自業自得」にとりわけ力を込め、ディルが言う。

「‥‥まったく、君には優しさというものが‥‥」
　と、ふくれっ面でぶちぶち言いかけて、不意に再び、ディルの瞳をじっと見つめるアリーナ。
　そして、一言。
「休み一回‥‥でいいのね？」

　こくり。
　うなずくディル。

「じゃあ‥‥お願いっ！　手伝って！」
　アリーナが、両手を合わせ、頭を下げて懇願する。
「素直でよろしい。じゃあ、手伝うとしますか」
　いかにも偉そうに言った後、ディルはさっそく、山猪にとりつき、身をこそげ始めた。

　アリーナに比べ、ディルはこういう仕事が得意である。
　ディルが加わってからというもの、それまでの倍以上のスピードで、肉がなくなっていく。

「しっかし、器用ねー」
「そう？」
　感心するアリーナに相づちを打ちながらも、ディルの手は休まることがない。
「いいお嫁さんになれるわよ」
「相手がいればね」

少しの沈黙。

こうして見ると、本当に普通の小柄な女の子でしかないディル。
しかし、この小さく華奢な体に、無限ともいえる戦闘力を秘めている事を、アリーナは知っていた。

〈地獄の帝王〉を倒し、この世界を救う「勇者」に、ふさわしい力。
世界有数の剣士・ライアン譲りの剣術（ソードマスタリー）。
あのブライが「天才」と認める魔道士、マーニャに直接鍛えられた火炎魔法（ファイア・ソーサリー）。
その妹ミネアの、そして神官クリフトの才能を受け継ぐ回復魔法（ヒーリング・ソーサリー）。
アリーナ自身からも‥‥彼女は、そのスピードと身のこなし、隙の突き方といった「接近戦の極意」を、徹底的に叩き込まれている。

さらには、この世でディルのみが使える力‥‥世界の人々が彼女を呼ぶ愛称「雷少女（サンダーガール）」の語源ともなった、「雷」を操る能力。
物質内外の「電位差」を魔法的にコントロールし、その物質と空気との間に「放電」を起こす。その攻撃に耐えうる生物は、地上には皆無である。

そして、特筆すべきは、彼女はそれらを複合して使う事ができる、ということだ。

それぞれの能力では、それを極めた者には到底かなわないディル。しかし、彼女の戦法の真価は、それらを組み合わせた時に発揮される。

彼女がかつて、エンドールでチンピラに絡まれた時に使用し、マーニャとミネアの度肝を抜いた、顔面をメラで攻撃して隙を作ってのボディへの斬撃。
「竜火斬（ドラゴンファイア）」と名付けられたその技を皮切りとし、ディルはいくつものオリジナル技をものにしてきた。

竜火斬（ドラゴンファイア）の改良型である、ギラの炎で相手の視界を奪っての斬撃「竜炎斬（ドラゴンフレイム）」。

ギラの炎を盾とし、相手の攻撃を防ぐ「竜炎壁（ドラゴンウォール）」。

相手の横に回り込み、側転から逆立ちの体勢のまま斬り付ける、予測不能の奇剣「竜幻斬（ドラゴンイリュージョン）」。アリーナ譲りの身のこなしがなければ不可能な技だ。

キングレオ王子が変化した「四本脚の獅子」にとどめを刺した必殺の剣。ルーラでジャ

ンプする方向を意志の力で「曲げる」ことにより、猛スピードで空を駆け、剣を突きたてる「竜飛斬（ドラゴングライド）」。

　そのバリエーションで、空中からルーラで下方向に「ジャンプ」、重力と合わせた力で敵を一気に切断する「竜落斬（ドラゴンフォール）」。あのバルザックの皮膚をも切り裂いた、強力な技だ。

　世界の人々には「竜の娘」「雷少女（サンダーガール）」と呼ばれ、敬愛され‥‥また敵からは「緑の髪の少女」という識別名で恐れられる、世界で唯一の「勇者」。

　そして。
　それほどの力を秘めながら、決して奢らず鼻にかけず。
　良く笑い、良く泣く。
　特に、涙もろさでは「泣き虫（クライベイビー）」の異名をほしいままにしている。

　山猪の死に心を痛め、人の業に悩み苦しむ、十七歳の少女。
　弱さと強さ、優しさと厳しさが、不安定に混ざり合った存在。

　それこそは、人間の「人間たる部分」の具現化ではないだろうか。
　そして、だからこそ、人は、ディルに惹きつけられるのかも知れない。

（私も、そうやってディルに惹きつけられてる一人なんだろうな）

　アリーナは、何となく、そう思った。
　彼女にとって、いまやかけがえのない親友である「竜の娘」。
　その横顔が、ほんのりと、炎に照らされる。

（こんなに頼りなさそうに見えるのに‥‥あんなに強くて‥‥）

　敵を斬り、焼き、雷で討つ、鬼神のような「竜の娘」。
　泣き虫でお人好しな、パーティーのマスコットであるディル。

（でも、それが全部、ディルなんだよね‥‥）

　ディルを、アリーナは理解していた。
　愛しい親友。

ほんの少し、微笑みが漏れる。

「どうしたの？　ニヤニヤしちゃって」
ディルの声に、アリーナはふと、我に返った。
「い、いや、何でもないわよ」
真っ赤になりながら、アリーナが手を振る。
「‥‥変なの」
訝しげな表情で、ディルがまた作業を始めた。

（でも‥‥いや、だからこそ、ディルは‥‥）
一瞬、わずかにアリーナの表情がかげったのに、ディルは気付かなかった。

さきほどの話の続きを、アリーナは考えていた。

ディルは、好きな人がいない、という。
もし、ディルが誰かを好きになったら、彼女はどうなるのだろう。
変わってしまうんだろうか。それとも、今のままのディルなんだろうか。

そして、ディルは、どんな人を好きになるんだろう‥‥

そんなことを、考えていた時である。

「じゃあさ‥‥」
ディルが言った。
「私をお嫁にもらってくれる？」

ごちっ。

「いたーい！」
アリーナが、何も言わず、ディルの頭を、げんこつで叩いた。
「そーゆー趣味はないっての」
「冗談よ、冗談」
「冗談でもダメ！」

「でも、前に、モニカ姫から告白された、って‥‥聞いたけど」

「は？」
　アリーナの顎が、かくん、と落ちる。
「だ、誰よ、そんなこと言ったの！」
　詰め寄るアリーナにたじたじになりながら、ディルが答える。
「いや、本人から‥‥」
「本人‥‥って、モニカ姫？」
　こくん。
　うなずく。
「はぁ‥‥」
　がっくりとうなだれるアリーナ。
「あの人も‥‥冗談キツいんだから‥‥」

　モニカ・ド・エンドール。
　正確には、現在の名は、モニカ・ド・エンドール・ボンモール。
　エンドールの現王オーギュストの一人娘。
　そして、ボンモール王太子リシャール（リック）・ド・ボンモールの妃である。

　彼女がリック王子と情を通わせている事が、まだ世に知られる前の事。
　父王オーギュストが、先だって開かれた武術大会の優勝の褒美として、事もあろうに、モニカを嫁にとらす、と公表するという「事件」があった。
　いざ大会が始まる段になって、それを悔いたオーギュスト王は、折からエンドールを訪れていたアリーナに、大会への出場を依頼、モニカを守ってくれ、と懇願したのである。
　それを受諾し、大会のリングに立ったアリーナは、特別予選で〈拳聖〉と謳われた名格闘家ハンを下した後、本戦でも、凄腕のブーメラン使いラゴス、美貌の女魔道士ビビアン、〈鋼（スティール）〉の異名を取る重装騎士サイモン、そして、北方の少数民族の生き残りである、「分身」を使う異形の選手ベロリンマンと、難敵を次々と撃破。
　決勝戦の相手・デスピサロの棄権というアクシデントも手伝い、満身創痍ながら、見事、優勝を飾ったのである。

　この時の、ベロリンマン戦の様子を、地元の少数配布の無料新聞の号外が伝えている。
　恐らく歴史に残ると思われるその号外には、戦うアリーナの似顔絵が、大きく載っていた。
　ボロボロに傷つき、顔を腫らし、血を流し‥‥
　しかしそれでも、歯を食いしばり、敵を見据える。
　失われていない、鋭い眼光。

そして、その時の大見出しが、こうだ。
「王女殿下（ハー・ハイネス・ネヴァー・サレンダーズ）、屈せず」

この見出しが、そしてその表情が、アリーナの通り名「不屈の王女殿下（ハイネス）」の元となっている。

戦いの後、戦勝報告のためにモニカ姫の元を訪れたアリーナに対し、モニカは、
「もしアリーナ姫様が男の人だったら、私は貴方を好きになっていたかも知れませんわ」
と言った、と言われている。
もちろん、その真意は定かではないが、それを指して、モニカは「告白」と言ったのであろう。

「あんなに傷ついてまで自分を守ってくれる人、そんな人に乙女は憧れますのよ、って、モニカ姫は言ってたわ」

ディルが言う。
サントハイム城解放戦の時に、エンドール軍の司令官として戦地に赴いたモニカから、彼女が聞いた話である。
無論、「告白」というのはモニカの冗談であったし、ディルもそれを知っていた。

「あ、そういうことね」
アリーナが苦笑する。
「そりゃそうよ。大事な友達だもん」

「大事な友達」だから、命まで賭けられる。
それが、アリーナの強さ。
その時にはモニカを、そして今はディル達パーティの面々を、命を賭けて守ってくれる、アリーナの強さ。
当然のことながら、それは、決して屈しないその心の強さだけではない。

アリーナの修めた技の数々。

エンドール武術大会特別予選、試合開始直後にハンを吹き飛ばした、変則の空中二段蹴

り〈蟹(クラッベ)〉。
　同試合、ハンに追い込まれた劣勢を一気に逆転した、カウンターの腕殺し〈楔(カイル)〉。
　本戦第一試合、ラゴスの腕をへし折り、意識を奪い、試合を決めた、打極投一体の複合技〈嵐(テンペスト)〉。
　第二試合、ビビアンの執拗な魔法攻撃に追い詰められたアリーナに大逆転勝利をもたらした、逆立ちからのスタンディングの締め技〈夢(トラオム)〉。
　第三試合、重装備のサイモンを一瞬でリングに転がした、秒殺の刈り投げ〈閃(ブリッツ)〉。
　コーミズ西の洞窟前で、死霊の軍団の包囲攻撃を受けた際、ディルとの連携で、軍団を操る死霊使(ネクロマンサー)いを倒した際の決め技。頭蓋を砕き、首を折る必殺の足技〈夜(ナハト)〉。
　今日、この山猪を屠った、脳天逆落とし。文字通りの殺人投げ〈杭(ブフレック)〉。

　そして、忘れてはいけない。
　アリーナ最大最強の必殺技。
　その右拳に宿る「破壊の王」。

　テンペでカメレオンマンを倒し‥‥
　エンドールでハンを、またベロリンマンをリングに沈め‥‥
　そしてキングレオ城では、王子が化身した四つ足の獅子の膝を砕き、勝利の糸口をつかんだ‥‥
　アリーナの全身の力と闘気を一気に打ち出す、必殺の拳打。
　その名は〈王(ケーニッヒ)〉！

　それほどの技と力を、アリーナの肉体は、秘めているのだ。
　そして恐らくは、まだ見ぬ技が、まだ見ぬ力が、アリーナの体内で眠っているに違いない。

　生身で、素手で敵を倒す。
　倒し続けて、自らの手を血に染めて、進み続ける。
　それこそが、アリーナ・フォン・サントハイムの人生。

「私は、死ぬ事からも殺す事からも逃げない」
　そう、彼女は言う。

　そして、彼女は、彼女の大事な人たちを守り続けるのだ。

（アリーナが男だったら、好きになっていたかも知れない、か‥‥）

一瞬前とは逆の立場で、ディルは、炎に照らされるアリーナの横顔を見ていた。

「私はアリーナ姫様のことを、本当に大切に想っていますのよ」
あの時、モニカが口にした言葉だ。
「だって、私のことを『大事な友達』だ、って言ってくれたんですもの。そして、命を賭けて、私を守ってくれたんですもの」

（なんか、分かるなあ‥‥）
ディルの瞳が、わずかに潤む。
今、自分の横で肉に塩をまぶしているこの少女に、モニカも恐らくは、自分と同じ感情を抱いていたのだ。
自分を守ってくれる、大事な、大事な友達。

「だからディル、私の分も、アリーナ姫様のことをよろしくお願いしますわね」

モニカの声が、優しい笑顔が、脳裏に甦る。

大事な友達だから、自分を守ってくれる人だから。
私も、アリーナのことを、力いっぱい守ってあげたい。
そのための力を、アリーナが、そしてみんなが、私に分け与えてくれたのだから。

「どしたの、ディル？」

アリーナの声に、今度はディルが、耳まで真っ赤にしながら、両手をぶんぶん振る。
「な、何でもない、何でもない。ははは‥‥」

「‥‥ふうん」
先ほどとは逆に、アリーナが訝しげな表情を浮かべる。
「ま、いいけど」

「ほら、他人のことを気にかけてる暇があったら、手を動かす！」
「はいはい。きっついなー」
ディルの照れ隠しの強い口調が、効いたようである。

＊

「終わったー！」
　もう何度目だろう。アリーナが、両手を伸ばし、後ろに倒れ込む。
「終わったー！」
　全く同じことを言い、全く同じ行動を、ディルも取った。

　いまや、肉は全て薄く切られ、一枚ずつ塩を挟んで、整然と積まれている。
　これを紙で包んで紐で結わえれば、作業は完了だ。

「よっ‥‥」
　紙包みを紐で縛ろうとするアリーナであったが‥‥
　ぐにょっ。
　力任せに紐を締めたので、中身の肉が横からはみ出してしまった。

「あー、もうっ！」
　見るに見かねたディルが、思わず手を出す。
　手際よく、はみ出た肉を元に戻し、再び紙で包み‥‥
　適度な力で、紐を少しずつ引き締め、全体に無理なく力をかけてゆく。

「ほら！」
　ディルが手を離すと、そこには、まさに見事な直方体にまとまった肉塊が、さも最初からその形であったかのように、現出していた。

「おー」
　ぱちぱちぱち。
　拍手するアリーナに、
「本当は貴方がやるのよ」
　冷たく言い放つディル。
　がっくり。
「‥‥反省してます」
　アリーナの、もう今日幾度目か分からない、反省であった。

「‥‥ディル」
　それからしばらく押し黙っていたアリーナが、やおら、口を開いた。

　今までとは違う、重い口調だった。
「ねえ、ディル‥‥私と貴方、どっちが強いのかな‥‥」

「えっ？」
　一瞬、全く理解できない、違う国の言葉を聞いたような気がした。
　思わず問い返す。
「ど、どうしたのよアリーナ、いきなり‥‥」

　しばらくの沈黙。

　そして、ディルが言った。
「そりゃ、もちろん、貴方の方が強いわよ」

　ディルにしてみれば、当然の事実であった。
　アリーナの、その技、その力、そしてその精神力。
　友として、師として、限りなく尊敬し、敬愛する‥‥
　彼女に（いや、彼女だけではなく、他の仲間すべてに）追い付こうと、ディルは努力しているのだった。

「そか‥‥」
　それを聞いて、ほんの少し寂しげに、アリーナは笑った。

「なんかねー‥‥」
　アリーナが、ディルの肩に頭をもたれかけさせる。
「鬼ごっこって、あるでしょ」
「う、うん」
「ずっとね、逃げてるの。でも追い付かれそうになって、それでスピード上げてまた逃げるんだけど、それでもまた追い付かれそうになって‥‥」

　一体、アリーナは何を言っているのだろう？

「逃げてるんだけど、逃げ切りたいんだけど‥‥追い付いて来る事が嬉しくて‥‥でも絶対捕まりたくなくて‥‥
　‥‥そんな感じかな」

　アリーナが、目線を上げる。

ディルの顔を見る。

きょとん、とした表情。
「アリーナが何を言っているのか分からない」、そう顔に書いてあった。

「‥‥ふふ」
アリーナは、なぜか、ほんの少し安堵した表情を浮かべた。
「いいのよー、わかんなくて」
少し、ディルに預ける体重を増やす。

満天の星の下。
ディルの肩に頭を預けた、そのままの姿勢。

ディルの温もりを、アリーナは頭に感じながら‥‥
アリーナの柔らかな髪の感触を、ディルは肩に感じながら‥‥

何も言わず。

時はただ、ゆっくりと過ぎてゆく。

「ディル‥‥」
「ん？」

しばらく後。
再び、アリーナが口を開いた。

「もし、ディルが、私より強くなった！ って思ったら、教えて」
そして、ディルの肩から、頭を起こす。
顔を、ぐいっと、ディルの顔に近づける。

「その時は、本気で勝負したげる」

そう言って、にこっ、と‥‥満面の笑顔で、不屈の王女殿下は笑った。

「アリーナ‥‥」

　その瞬間。
　ディルの頭の中で、全てがつながった。

　アリーナは、この眼前の世界一の武術家は、ディルを、自分が本気で戦いたい相手だと、自分の「ライバル」として認めてくれているのだ。

　その「ライバル」の‥‥他ならぬディルの影が、アリーナに追い付く時が来る。
　その時には、自分と戦え、と、アリーナは言っているのだ。

　先ほどのたとえ話。
　鬼ごっこの鬼は、ディルだった。
　逃げる子は、アリーナだった。

　成長著しいディルが、師であるアリーナに与えるプレッシャー。そのつらさ。

　たとえ話にまぎらせてあるとはいえ、プライドの高いアリーナが、その本音を素直に口にする事自体、珍しいことであった。

　その張本人に、それを知られたくない気持ち。
　親友として、それを知って欲しい気持ち。
　弟子に追い付かれ、焦る気持ち。
　弟子の成長を喜ぶ気持ち。
　相反するそれらが、アリーナの中で、複雑に絡み合い、混ざり合っているのだ。

　そして、子は、鬼に追い付かれる事を覚悟し、いや、むしろそれを待ち望み‥‥
　時が来たならば、全力で鬼と戦う。
　その決意を、恐らくたった今、固めたのだ。

　戦う相手の、親友の体温を感じながら。

　アリーナの技は、素手で敵を倒し、屠る。
　そのアリーナが「本気で勝負」する、と言うからには‥‥

ディルの体が、震える。
目から、今日三度目の涙。

「私、私‥‥」

電撃のように、体を突き抜ける感情。
世界一の格闘家の、そのライバルとして認められた瞬間。その感激。
しかしそれは、最大の親友との、命を賭した真剣勝負の時がいずれやってくる、その覚悟をディルに強いる物でもあった。

嬉しさと、つらさ。
それがないまぜになったものが、ディルの魂を揺さぶる。

そして、奇しくもそれは、アリーナがずっとディルに対して感じていたプレッシャーと、同じものであった。

アリーナの強さだからこそ、耐えられた感情。
ディルも今、それを味わっていた。

かつてのディルならば、耐えられないかも知れなかった、強い感情。

しかし。
ディルもまた‥‥

きっ、と、口を真一文字に結び、
涙を拳でぬぐって‥‥

こくっ。
力強く、笑顔で、ディルはうなずいた。

ディルもまた、まぎれもなく、アリーナの強さを受け継いだ者であったのだ。

「よし！」
　アリーナが明るく言う。
「でも、そのためには、まだまだ鍛えないとね」
「もちろんよ」
　ディルも、笑って答える。

「じゃ、いつか来るその時のために」
　そう言って、アリーナは、右手をディルに差しだす。
「約束よ」
「うん！」
　ディルが、その手を握り返す。

　固い、固い握手。
　終生の友として、そして終生のライバルとしての、新たな契約であった。

　ディル対アリーナ。
　前人未到の剣と呪文の複合攻撃、対、常識を超えた神速の殺人技。
　「雷少女（サンダーガール）」対「不屈の王女殿下（ハイネス）」。

　その真剣勝負は、果たして実現するのか？
　ディルが、アリーナを超えた、と思う事ができる日は、果たしてやってくるのか？
　そして、それが実現した時‥‥最後に立っている者は、どちらなのか？

　それを知る者は、まだ誰もいない。

　ひとつだけ、言える事がある。
　もし、その時が来たならば。
　もし、この対決が実現したならば。
　恐らくそれは、歴史に残るどの戦いよりも、熱く激しく美しい、希代の名勝負となる事は、間違いない‥‥。

　これからも、彼女たちは共に、生き続け、前に進み続ける事だろう。

これからも、彼女たちは共に、強くなり続ける事だろう。

いつか来る、その時のために。

＊

陽がのぼる。
新しい一日の始まり。

「ふぁ〜、あふ」
大きく伸びをしながら、天幕(テント)からマーニャが出て来る。
朝に弱い彼女にしては、珍しく早起きであった。

「ん？」
そこで、彼女が見たもの。

ブライの後ろ姿であった。

老人は、朝が早い。
それは、どこの世界でも変わらない、普遍の事実である。

「おはよ、お爺(ブライ)ちゃ‥‥」
近寄って、声をかけかけたところで、言葉が止まった。

ブライが見ているもの。
それは、座ったまま、寄り添い、眠っている、ディルとアリーナの後ろ姿だった。
昨夜とは逆に、ディルがアリーナの肩に頭を載せ、そしてその頭に、アリーナの頭が軽くもたれかかっている。

マーニャが二人の前に回る。

幸せそうな寝顔。
二人の手と手が‥‥指と指が、固く握り結ばれていた。

あれから、彼女たちは、どんな話をしていたのだろうか。

それとも、何も語らず、そのまま二人で、星空を見ていたのだろうか。

もちろんそれは、二人きりの秘密である。

「ずいぶん器用な寝方してるわね〜」
感心したような、呆れたような口調で、マーニャがつぶやく。
「どうやら、ディル殿が姫様の罰を手伝ったようじゃな。それも徹夜で」
いつも通り、苦虫を数匹まとめて噛みつぶしたような、ブライの口調。
「ディル殿は姫様に甘すぎる。せっかくのライアン殿の計らいが台無しではないか」
「まあ、この娘(ディル)らしいって言えばこの娘(ディル)らしい話だけどね」
「ふん」
マーニャの指摘に、ブライはただ、鼻を鳴らす。
眠っている二人の足元には、スライスした肉の入った紙包みが転がっている。
「この様子では、姫様も頑張られたのであろう‥‥良しとするかの」
ブライは、そう言い残すと、きびすを返し、去っていった。

歩き去る彼の、歩みの支えとなっている、茶色の杖。
ごつごつした平面の複雑な集合で構成された、微妙に曲がった杖の頭には、火山の火口を模した窪み。
そしてその中に、淡く橙色(オレンジ)に輝く、魔力を秘めた宝石。

サントハイム王城に眠っていた、大地の力を秘めた魔杖「マグマの杖」。
「地脈」と呼ばれる大地のエネルギーの流れを操ることができるこの杖の力は、大地を裂き、溶岩を吹き上げ、そして、地脈の流れいかんによっては、山をひとつ丸ごと崩す事すら可能だと言う。
そして、その力を解放する時‥‥北方の谷を埋める土砂を全て切り崩し、ガーデンブルグ王城への道を再び開く時。
その時は、もう間近に迫っている。

「さて、そろそろみんなが起きる時間だね」
つぶやくと、マーニャはしゃがみ込んで、眠る二人の肩を、優しく揺すぶった。

「ん‥‥っ」
「‥‥ん‥‥」

　ゆっくりと目を開く二人に、マーニャは優しく呼びかけた。
「おはようさん。朝だよ」

　天幕から、人が次々と出て来る。

　いつも通り、大荷物を背中に背負ったトルネコ。
　神官服に身を包んだクリフトは、もう朝の祈りを済ませたのだろう。
　ライアンの褐色の筋肉に、薄紅色の半身鎧（ハーフプレート）が映える。
　ブライも、いったん天幕に引っ込み、しっかり旅の支度を済ませている。

　隣りに立っている女性用の天幕から、ミネアが出て来る。
「おはようございます、みなさん」

「おはよ。今日は遅いじゃん」
「ね、姉さん！　どうしちゃったの、こんなに早く！」
「‥‥そんなに本気で驚かなくても」
　ツッコミを入れるマーニャに構わず、ミネアは顔を引きつらせて叫ぶ。
「いやああ！　あの、普段ならいくら起こしても起きない姉さんが、自力で、しかも
　こんなに早く‥‥今日はきっと何か良くない事が‥‥」
「‥‥殴るよ」

　こんな心温まる会話の傍らで、目を覚ました二人の少女が立ち上がる。

「おはようございまーす‥‥ふあ〜」
「おはよー‥‥ふああ〜」

「姫様、大口開けてあくびなんて、みっともないですよ」
　ほんの少し顔をしかめて言うクリフトに、こりずにあくびを連発しながら、アリーナが答えた。
「朝から細かいわね〜‥‥あ〜ふ‥‥昨日遅かったんだから、許してよ」
「アリーナ、頑張ってたもんね‥‥ふあ〜ぁ」
「‥‥もう、ディルまで」

「よし、みんな起きたな」

　ライアンが、パーティーの面々を見回す。
「さっそく、今日の行動予定を確認する」

　恒例の、朝のミーティングの開始である。

　ライアンの声と同時に、トルネコが、地べたに「宝の地図（トレジャーマップ）」を広げる。絶妙のコンビネーションだ。

「現在位置はここ。順調に行けば、今日の夕方には、目的地、ガーデンブルグ南の谷に到着する」
「そこで、こやつの出番、というわけじゃな」
　ブライが、手に持つ「マグマの杖」を掲げる。
「その通り。魔道士（ブライ）殿、杖の使い方は大丈夫ですな」
「うむ。もとより」
「その時は貴殿だけが頼り‥‥くれぐれもよろしく頼みます」
　ライアンは、頭を下げた。
　年上の魔道士、サントハイムの生きた伝説に、敬意を払う。

「その他には特に予定はない‥‥では、今日の食事当番を確認しておこうか」
　それもまた、朝のミーティングの恒例行事であった。
「山の幸当番が、踊り子（マーニャ）殿、占い師（ミネア）殿、神官（クリフト）殿。川の幸当番が、魔道士殿と勇者（ディル）殿‥‥」
「はい！」
　ライアンの話の途中で、ディルが手をあげた。
「川の幸当番、アリーナと交代しまーす！」
「え、ええ〜っ！？」
　元気なディルの言葉に、アリーナが驚きの声を上げる。

　食事当番は、一日ごとに、一定の法則に従って、自動的に決定されている。
　ライアン、アリーナ、マーニャ、ミネア、クリフト、ブライ、ディル。
　この七人が、自動的に、休み、山の幸当番三人、川の幸当番二人、料理当番一人に割り振られ、そして、一日ごとに、その割り当てがひとつずつずれていくのだ。
　それによると、山の幸当番・川の幸当番は先ほどライアンが言った通り、料理当番がライアン（とトルネコ）、そして休みがアリーナ、となるはずだったのであるが‥‥

「ちょ、ちょっと、いきなり何言いだすのよ！」
「ゆうべ、休み一回もらったわよね。手伝うのと引き換えに」

「あ‥‥」
　そうだったのだ。確かに昨夜、アリーナは、休み一回と引き換えに、ディルに罰を手伝ってもらったのである。
「というわけで、反論は却下。川の幸当番お願いね」

　今回の場合、正当性は、ディルの側にある。
　あまつさえ、ミーティングの司会は、昨夜「罰」を決定したライアン。
　川の幸当番のパートナーは、アリーナの教育係ブライ。
　いずれも、少なくとも今回の事態に際しては、アリーナの勝てる相手ではなかった。

「はい」
　がっくりとうなだれたまま、手を上げるアリーナ。
「‥‥今日、川の幸当番やります」
「よろしい」
　表情を変えずに、ライアンが言った。
「川の幸当番は魔道士殿と王女殿、料理当番は私、そして休みが勇者殿。よろしいな」

「とほほ‥‥」
　アリーナがまた、肩を落としながらも、
（ま、釣り名人（ブライ）と一緒でよかったかも。全部ブライに任せて、こっそり寝ちゃお）
　などと思っていると、その当のブライが、声をかけて来た。
「今日は、釣りの腕をビシビシ鍛えて差し上げますからな。居眠りなんぞしてる暇はありませんぞ。ほっほっほ」
　笑いながら、去って行く。
　まるで、アリーナの心の中を見透かしていたようだ。

「‥‥あ、悪夢だ‥‥」
　アリーナは、その場に、がっくりと崩れ落ちた。

＊

「荷物、積み終わったよ！」
「よし、忘れ物はないな」
「ありませーん！」

　馬車はいまや、出発の準備を万端整えた。

「とほほほ‥‥」
　馬車の中では、アリーナが今だに、肩を落としていた。
「せめて、馬車の中で寝ていったら？」
「‥‥そうする」
　優しいミネアの提案に、力なくうなずく。
「敵が来たら起こすから」

「神官(クリフト)殿、出発を！　くれぐれも周囲の警戒を怠り召さるな！」
「了解！」
　幌の中からのライアンの叫びに、クリフトが元気よく答える。

　馬車を引く白馬・パトリシアには、もっぱら、クリフトが御者として乗る。
　彼が前を、そして遠目の利くライアンが幌の後ろから後方を警戒する。それと同時に、トルネコが、彼の特殊能力「鷹の目(ホークアイ)」で定期的に周囲を俯瞰(ふかん)する。
　敵を発見し次第、彼らが大声で警告。それに応じ、パーティが一気に展開し、迎撃準備。
　これこそが、パーティを今まで誰の欠員もなく生き延びさせた、いわば彼ら独特の「早期警戒システム」なのだ。

「今日も頼みますよ、パトリシア」
　御者(クリフト)の優しい呼びかけに、パトリシアが雄々しくいななき‥‥
　そしてゆっくりと、歩き始める。

＊

　ガーデンブルグ南の崩れた谷まで、あと一日足らず。

　勇者たちの旅は、続く。
　明日も、明後日も。

　勇者たちは、人間の命を少しでも多く救うために生き続け、
　そして、己の目的のために、前に進み続けるのだ。

　まだ年若き勇者が。
　「導かれし者」たちが。

そして、我々人間が。

今後とも、生きる力を、そして進む力を、持ち続けられるよう祈りつつ‥‥

（おわり）